

KSKQ

# ゆうとおん通信

NO.112	2019年4月号	郵便振り込み口座 00910-9-106532
編集人 (社福) ゆうとおん ゆうとおん編集員会 八尾市久宝園 2-30-4		

一九九二年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日) 発行 定価50円

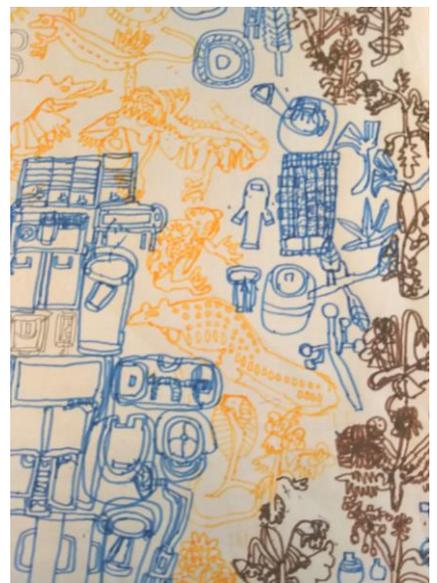


**福島 正人 (ふくしま・まさと)**  
 1963年大阪市生まれ。生野ろう学校  
 (現生野聴覚支援学校)の幼稚部から  
 高等部で学ぶ。一般就労の後ゆうとおん  
 に。現在グループホームで生活。57歳

福島さん、いきなり絵を描き始める。「いま、おいくつですか?」と手話でたずね白い紙を差し出したときのことだ。じつとのぞきこむ私たち。ボールペンの先から一瞬の迷いもなく次々と生まれる小瓶の絵。もしかしてこれはコシヨウの瓶か? 再びなにかの容器が追加され、ラベルが細かく描かれていく。思わずみとれてしまふ。そばで「これはなんですか?」と余計なことを聞く野次馬に画伯の答えはない。ときどき時計に目をやる福島さん。そうか、もうすぐお昼だから、きつとその前にやるべき事があるにちがいない。

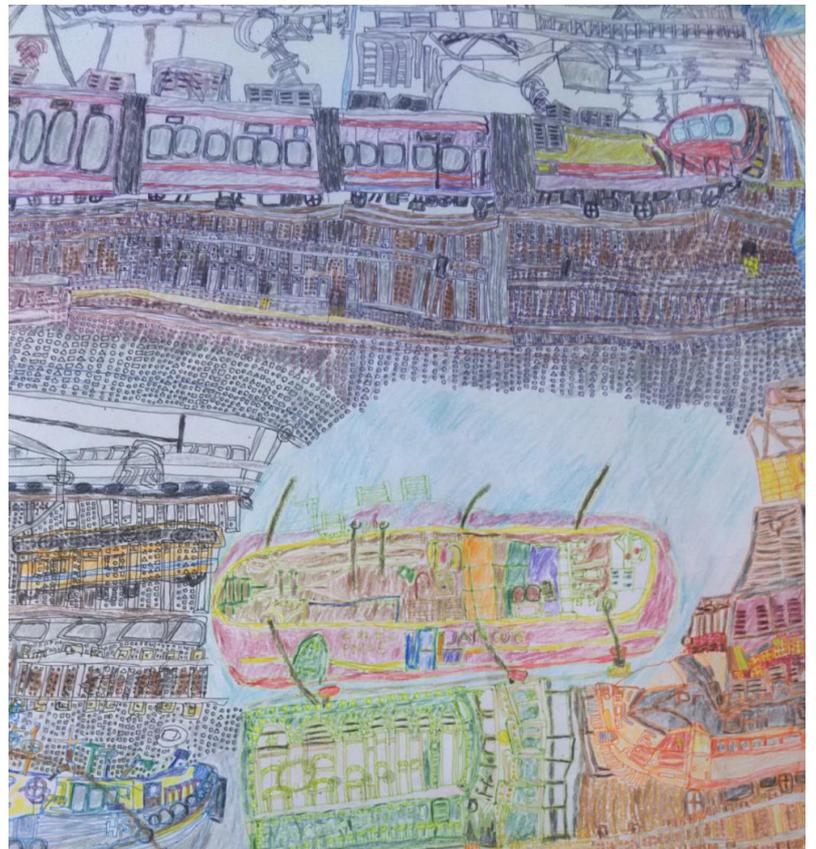
## ここで、生きる

人シリーズ No.13



絵の素材はたいてい身の回りにある物だ。瓶や野菜に弁当のおかず、動物に魚。まだまだある。食器や鍋、台所の調味料。電車に線路。それらが整然とすきまなくうめつくされた絵は圧巻というほかない。福島さんの絵は、毎年ゆうとおんが販売するカレンダーの挿絵になってきた。

若かりし頃、部品の組み立てやおしぼりの会社で13年働いていた福島さんだが、当時のことを詳しく知っているものはない。几帳面で曲がったことが嫌いだから色々あったかもしれない。ゴミは細かく細かくちぎって捨てる徹底ぶり。以前ホームの世話人が笑って話してくれた。「福島さんに見つかったら大変。チェックされる前にゴミはこっそり捨ててますよ」と。



●2015年  
 「大阪府現代アートの世界に輝く新星発掘プロジェクト第4回公募展」  
 佳作に選ばれた福島さんの作品。梅田スカイビル40階の  
 空中庭園展望台ギャラリーで展覧会が開催されました。



目次

- ・「ここで生きる」 福島 正人 ..... (1)
- ・「事例検討会」を終えて ..... (3)
- ・「事例検討会」…その後 新 神武王 ..... (4)
- ・虐待について考える No.4 堀 智晴 ..... (5)
- ・作業所の日々のなかで 稲垣 寛子 ..... (6)
- ・分かりたいと思うこと 松野 香織 ..... (7)
- ・エンパワメントと「みる・きく・はなす」ことについて 豆子(西尾) 寿士 ..... (8)
- ・リレーエッセイ 「反差別の生き方を模索する」 安井 仁 ..... (9)
- ・当世作業所事情No.73 畑 健次郎 ..... (10)
- ・映画『道草』の紹介 ..... (12)

2018/12/15

# 事例検討会「を終えて

ゆうとんでは、毎年一回12月に職員が一堂に会して「事例検討会」を行っています。三名の方の事例をもとに日頃の様子や、現場での悩みなどを聞き、さまざま意見を出し合いました。その人の人生を、どんなふうに対応するのか、職員として、また、その人の傍らで生きている一人の人間として、自分のあり様を考える一日となりました。講師の堀先生から助言もいただき、私たちの中にいろいろな気づきがあったと思います。

(富澤 久美子)

●3つの事例とも、もう少し職員側の心からの優しいかわりが必要だと思いました。相手の気持ちにどこまで寄りそえているのか、表面的な寄りそいになってしまっていたのではと思いました。事例を掘り下げることで生きざまというか、誰しも毎日必死で生きているとつくづく感じさせられました。せっかく話し合ったことを無駄にせずよりよい関係性を作っていけるよう努力したいと思います。

(I・女性)

●すべての事例でみな色々なシーンで悩んでいることを再確認しました。話し合いで出た「支援者の意識が問われている。みなメンバーさんは職員のことをよく見ておられる」にドキツとしました。私もこの仕事を始めた頃このことを強く実感したことがあります。メンバーさんは繊細であること、忘れてはいけないと思いました。

(K・女性)

●インターネットの発達により、今までは目に見える相手とのコミュニケーションという部分の関わりが大半であったが、目に見えない相手との関わりへと変化してきているので、今まで以上に「コミュニケーション」というものが複雑で難しいものになってきているのだと感じました。支援者と当事者の知識に差が出てしまふ場合があり、支援を行うにあたって必要な知識を身につける必要性について考えさせられました。

(K・男性)

●事例についての話を深める中で課題の多くは職員にあると改めて気づきます。今日出てきた意見等を今後の活動に。それにしても日頃の接し方(話ことば)と文章になったそれら(書きことば)の落差を感じます。彼らの気持ちの中に入っていくためにも一考を。

(H・男性)

●私の参加したグループディスカッションは関係性の事例でした。きつい言動への対応、なぜそこまですってしまったのか発表者の悩みを皆で話し合いました。

人間関係の土台が信頼かどうかというところは、その人の人生に深く関わってくるところで、そこへのサポートはねばり強さ(普段の関わり)のなかであたたかい言葉かけや認められること、感謝されることなどで相手から受入れられているという思いが抱けて信頼感が生まれる、それを積み重ねていくこと(共感的に話を聴くこと)の大切さなどを確認しました。また「見方が変われば違った視点で捉えられる」というお話からも連携やチームワークの大切さを再確認する機会になりました。

(M・女性)

## 「事例検討会」：その後

インターネットやSNSがいまやごく身近な存在になり、私たちのコミュニケーションや対人関係のあり方にまで大きな影響を及ぼす社会になってきました。

今回の発表では、ネット社会特有の問題と現場で付き合い方に悩む事例が報告されました。発表者に「その後」を語ってもらいました。

### ●発表の要旨

Aさんの「ネット問題」の本質は、実は現実世界での人間関係づくりの問題だったのではないかとユーチューブで他のユーザーとトラブルになり自傷行為に至る姿には人間関係作りにも悩むひとりの青年の姿を見いだすことができる。画面の向こうの人と仲良くなるために実況主が使う業界用語を使いこなし、繰り広げられる世界に必死で合わせ一緒に楽しむもうとするAさんの苦闘から、ネット、現実にかかわらず人間関係づくりに困難を抱え、それでも挑戦を続けていることに気づく。私たちが本当に考えるべきは「Aさんの人間関係づくり」への支援ではないか。

事例検討会で発表の機会を得た。私はこの検討会で、現状を他の職員に訴え、問題の解決策を得たいと思っていた。それは得られなかった。参加者はみんな、一生懸命に受け止め、考えようとしてくれた。具体的に自傷行為に至らないためや、自傷行為の根本原因である人間関係づくりでのつまずきの問題を解決するためのアイデアもいろいろ出してくれた。しかし、根本的な解決方法が出たわけではなかった。年末の事例検討会以降、自傷行為は頻度も多くなり、現場としては「ひどくなっている」と言わざるをえない状態だ。

もちろん報告者である私が問題を本質的に理解できていないからということもあるだろう。ぶれた問題意識はぶれた議論につながる。しかしそれ以上に、自傷行為という問題の難しさがある。本人でさえ、うまく解決できないから自傷行為にいたっているのである。他人である我々支援者が、一度の議論で解決策など得られるわけがない。ネットでのトラブルと自傷行為の関係は「問題があるなら使用を制限する、しない」というその場しのぎの対応では解決しない。

生真面目で、ときどき「よくないこともする」お茶目なAさん。そんなAさんの強みをいかしながら、ネットに限らず、リアルだけでも限らず、楽しいと思える人間関係を作っていける環境を私たち支援者は、どうやってつくることができるか。

問題の根本的な解決は、一人では無理だ。やはりチームで解決するしかない。今回の事例検討会のような密度の濃い議論を、さらに現場やその周辺で何百回も重ねることで、自傷という問題をご本人と乗り越えていきたい。

(グループホーム世話人 新 神武王)



堀 智晴(ほり・ともはる)

1947年生まれ。長い間、障がいのある子どもの保育、教育について、現場の保育者や先生と共同研究に取り組む。「今は、学校卒業後に、障がいのある人が地域の中でどう生きていけばいいのかについて考えています。みなさん、一緒に考えましょう」。インクルーシブ(共生)教育研究所代表。ゆうとおん監事。

それにしても、今回の虐待は、心愛さんの命を守ることはできた。学校と児童相談所の決定的なミスが心愛さんの命を犠牲にしてしまった。学校も児童も子どもの命を軽視していたと言われてもおれない。私もくやしい思いをいだかずにはおれない。親はしつけとして虐待におよんだらしい。障がい者虐待も支援や指導がエスカレートして虐待になる。言うことをきかない、不十分なことしかできない、なぜもつとしっかりやらないのか、できないのか、虐待する側の勝手な思い込みで弱者が犠牲になるのだ。

栗原心愛(10)さんが両親からの虐待で命をなくした。実の両親なのに、なぜ、と考えてしまうが、まだ詳細は分からない。この親もその親からの虐待を受けていた(虐待の連鎖)のかもしれない。

## 親による虐待と 障がい者虐待の根っこは同じ

親が子どもをどうとらえているのか、指導員が障がいのある人をどうとらえているのか、ここに共通点がある。

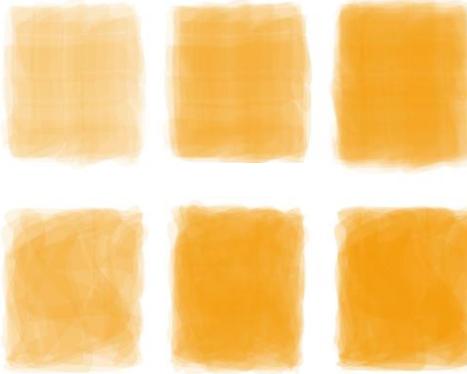
それは、子どもも障がいのある人も「未熟な存在」であるので、「指導してやらないといけない」という思い込みが共通しているのだ。そして、虐待する側が優位に立っているのである。

優位に立つ者が、謙虚に自らをふり返ることはほとんどない。だから、この優位性を制限する必要がある。そこで親権を制限する法がいるし、また、障がい者虐待防止法ができた。

しかし、法的に規制するのは、もともと限界がある。私は、日本の子育ての文化の歴史、家制度の文化の歴史、障がい者問題の文化の歴史の中に、虐待の深い根っこ(源)があると考えられる。子どもも障がい児・者も一人の人間とみなしていないのだ。このような見方が、まだこの自分の中にもあるのではないか、点検し見直す必要がある。

No.4

# 虐待について考える



## 作業所の日々のなかで

はーと

生活支援員 稲垣 寛子

すもーるのメンバーさんは3名。1人は私より4歳下で、2人は年上だ。

日中は“仕事”の場だから、グループホームと違って多少の緊張感があってもよい。と同時に必要なのは格好よいこと。Aさんは姉御肌で「ぼーっと座ってる間ないわ。仕事はきびしいもんや」とスタコラハウスの話をする。Bさんは肩や首もコリコリなのに何食わぬ顔で内職作業に精を出す。Cさんは大小さまざまな卵を10個ずつ選んで、ほぼ同じグラムのパックに仕上げていく。それぞれとても格好よい。

介助するときは最小限にさりげなく、また素っ気なく。ふらつくかなと思っても、こちらから先に手をつないだりはしない。口腔ケアでは「きれいに磨いてピカピカですね。私にも手伝わせてください」と言うのだが、お世辞ではなく本当にピカピカに光っている。トイレへの誘導は、「私、先に入らせてもらっていいですか?」と入って、「お先にすみません。次どうぞ」と出てくる。

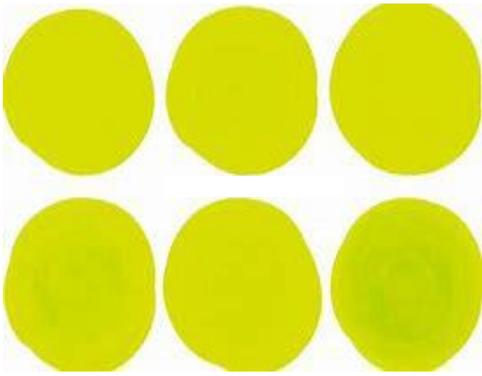
職員であるだけでも権力である。言葉の言い換えで自分の意識を変えようと試みる。「左手しか使えない」を「左手だけで器用にできる」。「して下さい」を「私も一緒にします」。「頑張ってきて下さい」を「今日も頑張ってきます」。耳障りな「面倒見やなあかん」は「私はここでみんなと一緒にいるから」。これも耳障りな「連れて行く」は「私の運転で一緒に行く」等々。

Aさんは家族がどんな仕事をしているか、話をする。父親が怒って新聞を破いた話まで出てくる。Bさんの通院に付き添う。倒れる前はパンチパーマの職人だったらしいが、看護師たちにここにこさいさつする。リハビリを頑張ってた、奥さんにも優しくなったねと、結構人気者だ。Cさんは正月に白味噌の雑煮を所望。鍋をするならどんな野菜を入れるとか詳しくて、厨房の職員にも必ず「おいしかった」と伝える。そういったひとつひとつのエピソードからその人の人生を想像する。もつと想像するために質問を続ける。この毎日がまた思い出になっていくのだから、心はいつもあなた向きで。

まだしばらくは共に働く。この職員は仕事ばかり押しつけて嫌なヤツだし、失敗は繰り返すし、体はガタがきて格好悪いことばかり。ちようどよい。免罪符なり。

※スタコラハウス

近鉄八尾駅の近くにある喫茶店。  
法人が運営する施設で軽食やコーヒー、クッキーなどを販売している。



## 分かりたいと思うこと

### のびやか相談支援センター

相談支援専門員 松野 香織

誰にでも言葉にならない思いがあり、それを抱えて生きていると思います。ただ「言葉にならない」と「言葉にできない」の違いを考える時、当事者の言葉にできない思いの表現をどうすれば理解できるのか、悩みながらの毎日の中で私が思っていることを書かせてもらいたいと思います。

担当の方に言葉にできない思いの表現が周囲との摩擦を起こして「苦しんでおられるのでは？」という方がいて、その状況が長く続く中で相談員としてできることは何かを考えていました。

『しんどい、何かに困っている』というサインは受け取れるのですが、この表現を通して何を伝えたいのか、一緒に過ごす中で少しでも気持ちが理解できたり、ただ傍にいただけでも何か力になれないかと思ひ、相談員として限定的な関わりになります。日中活動の時間の中で週1回30分面談をさせてもらうことになりました。

面談では話をしたり、ご本人が楽しく集中できる遊び（クロスワードや数字つなぎ等）を一緒にしています。毎回「少しでも気持ちを分かりたい、何か力になりたいと思っていますよ」と伝えられているか、関わりの中で自信につながるような働きかけができていくか、そんなことを思いながら一緒に時間を過ごしています。

支援者間で思いは共有しているのですが、相談員として役割の中では違った視点から「主体は本人（当事者が自らの生活に主体的に取り組みそれを周囲が支えていく）」を軸に、気持ちに寄り添い耳を傾ける、今回私の提案を日中事業所が受け入れ協力して下さったように、取り組みの具体案や決め手が見つからなくても「何かやってみよう」をそれぞれがサポートしたり応援できる、ゆうとおんがそんな場であれば良いと思います。

これからも「分かりたい」を大切に、いつも近くでゆるやかに、必要な時はより強く誰かとながれるようにここに居れるといいと思っています。

## ■現場の悩みを一緒に考える

## エンパワメントと「みる・きく・はなす」ことについて

特定非営利法人活動法人ラルゲット 豆子(西尾)寿士

臨床心理士・相談支援専門員

筆者は、今年度から週に一度ゆうとんを訪問している。三つの施設(うえぶ、はーと、ほーぶ)を巡回し、そこで働くスタッフに対するスーパービジョンをする機会を得た。また、さまざまな困難さはあれど、地域であたり前に暮らす(ことをめざす)Yさんとの関りも継続している。

私の本業は、大阪市内で 相談支援事業所と障がい児通所支援事業所を運営している(本年春ごろに居場所づくりを核にした生活介護を新規開設予定)小さな法人で、理事長および相談支援専門員として走りまわることである。さて、今回ニュース原稿の依頼があり「現場の悩みを一緒に考える」というタイトルがついている。

私たちにとって現場とは、「障害者」と呼ばれ、なんらかの困難さ、特性、症状などを抱えて生きている方と日々向き合う仕事場である。どう向き合うかと問われれば、「人として向き合う」と答えることもある。それは、社会モデル(生活モデル)と呼ばれ、医学モデルと対比される。

それでは、社会モデルにおける私たちの専門性はなにかと問われれば、すつきりとは答えられない。そもそも専門性という問いの立て方自体が間違っているという批判もできる。当事者から学ぶのが私たちの専門性だと答えて、障害者支援における知識・技術の習得をごまかすこともできる。

1960年代から始まった障害者(解放)運動が、親や専門家の価値観・人間観を鋭く批判し、資本主義社会の根幹をゆさぶる問題提起を続けていることを考えれば、私がここでもなにかを書くことは取るに足らないことだと思える。それでも、私は自身が障害者支援という現場で体験したことを、なんらかの方法で伝えることが必要だと強く感じている。

まずは、基礎や基本がもつとも大切だ、という当たり前の結論から始める。その基礎・基本とは「障害者である前に人間だ」ということである。

さまざまな事例検討をしていると、どうしても問題、課題がクローズアップされる。その時に、その人が「ひとりの人としてどう生きてきたか」という視点から成育歴や生活史を振り返ることは、極めて重要だと思われる。そして、そのような作業をすると、たいてい自分たちはその人を十分に知らなかった、知る努力を怠ってきたという反省を突きつけられることになったり、想像もしえなかった新たな発見に驚いたりするものである。

エンパワメントとは、その人の顕在的・潜在的な力に着目して、その力が生活の質の向上や、人生の楽しみや喜びにつながるように支援することだと私は考える。さらに、それをするためには、日々あわただしく過ぎる日常の場面で、支援者は一度立ち止まり、次のように問いかけることが必要なのかもしれない。私は、彼ら・彼女らの本当の姿を観ているのか、本当の声を聴いているのか、心にとどく対話(やりとり)をしているのか、と。

そうやって、支援の質、関わりの質を問い直していると、自然に、その当事者の問題や課題が解決したり消失したりすることがある。問題や課題は、彼・彼女の中にあつたのではなく、関係性の中にあつたのである。注意深く、みる・きく・はなすを実践することで、支援者と当事者が、相互にエンパワメントしていくのである。これが、あらゆる実践の基礎だと感じている。



## 反差別の生き方を模索する

ゆうとのおんはーと

サービス管理責任者 安井 仁

というよりも、現在は、ぼくのこれまでの反差別の生き方が過ちではなかったのかと考えるようになりました。

ぼくは「普通」という言葉が大嫌いです。なぜなら「普通」という言葉は大抵の場合、その時代を支配する支配者側の価値基準で判定されるものであるからです。このことを障がい者差別の問題に照らし合わせた場合、我々「指導員・支援員」は現場でいつも危うい対応に迫られていることを意識せねばならず、ぼくはこれまで、この一点にのみ拘って同僚や上司と意見を衝突させてきました。

しかし、アンドレ・ゴルトツの「公教育制度は、すでにある社会的差別に文化的基礎を与えるものである」という言説が正しければ、多くの人々がこの装置の影響下にあることはほぼ間違いなく、本来はそのような社会装置の存在と闘うべき存在の福祉職員が全く気付いていないことも、ある意味自然なことなのかも知れない、と最近では考えるようになりました。

確かに、様々な媒体を通して支配者側から垂れ流されている「普通」という危険なイデオロギーに支援者自身が気付いていないという構図は、考えるだけで恐ろしい状況なのですが、だからといって、反差別の理論を振りかざして相手を打ち負かすスタンスは、正直、反差別の行動とは言えないと思います。

反天皇制を唱えながら、内部組織で内なる天皇制を確立している運動家ほどダサイものはないと考えます。

反差別の理論が他者を論破するための目的として使用された場合、その目的は人間解放ではなく、人間疎外に向かうようになると思います。

長々と話を展開してきましたが、結局は「普通」を信奉している相手であっても、まずは対話を心掛ける姿勢が反差別の生き方には不可欠であるとぼくは思います。思想的には厳しく、人間的には優しく！をこれからも大切にしながら生きていきたいと思えます。

福祉の分野で仕事をしよう！とぼくが思うようになったのは、多分に花園大学、とりわけ人権教育研究室（現 人権教育研究センター）との出会いが大きかったからだと思います。当時、人権教育研究室には学生委員会なる組織があり、社会福祉学部の学生を中心にフィールドワークや人権問題に関する勉強会を盛んに行っていました。ぼくも彼等の影響を受け、その頃は人権問題の勉強に夢中となっていました。また、精を出す中で、反差別の理論も自然と身につくようになりました。しかし、この理論武装された知識が社会人となってからの人間関係に暗い影響を与えたことは間違いないと、今は確信しています。

## ● 当世作業所事情 74

グループホーム「ピリカ」住人、

ダンデー長岡、享年54歳

畑 健次郎

2月9日の土曜朝、身体がだるく熱を測ると37度ちよつとあります。咳も出て、のども少し痛みます。念のため病院へ。罹るはずがないと思っていたインフルエンザでした。

2月11日の早朝は、1時間半ほどの配達の仕事がある日です。さつさと済ませて、帰って寝るつもりでした。ところが、どうしても事務所の鍵が開きません。悪戦苦闘の末、仕方なく鍵の修理会社に電話しました。車の中で待つこと1時間半。2、3分、鍵穴をガチャガチャやっていますが、ちががあかないと思ったのか、鍵修理人は電気ドリルで鍵穴をこわしました。鍵をつぶしても開錠といえれば開錠。開錠代34600円。鍵を付け替えたら、さらに5万円強といえます。人の弱みにつけこむ商法（か、どうかは見解の分かれるところですが）にムツときて、付け替えは断りました。

気を取り直して配達に出ると、道路はスイスイ。

他人と接することもなく、作業を終えました。そういえば「建国記念の日」です。格差が拡大し、全体主義へと傾斜しつつある日本の未来を憂える間もなく、家に帰りつく夢の中の住人になってしまいました。

どのくらい寝たのか、電話の呼び出し音が近づいてきます。通所メンバーのAさんでした。

「（職員の）Bさんが辞めたのは7月2日やったなあ。ゆうとおんと、もめたから辞めたんか？」と訊いてきます。Bさんは確かに昨年7月に退職しています。

「もめたなんてことはないよ」と言うと、「ケンカしたって聞いてるで」と食い下がります。「みんな、いろいろ都合があると思うよ」と応えろと、少し納得したのか、言っても無駄だと思ったのか、次の話題に移ります。

Aさんに限らず通所メンバーの多くは、職員同士の会話の断片や、その場の雰囲気から、時には正確に状況を把握し、時には自分の物語の中に「情報」を組み込みます。職員はのほほんとしていてもやっていけないことはありませんが、通所メンバーは、こちらが思っているよりも緊張して五感を働かせています。

Aさんは養護学校を卒業して、すぐゆうとおんにやってきました。きれいな字を書き、誰よりも器用にハサミを使います。口は悪いけど、好きな女性にはまともに口も利けない純情な青年です。

言っていることと悪いことの区別もつきません。ただど気になったことは口にしなくてはおれません。記憶力がいいので、適当に忘れていくということもありません。また余計なことで気を揉ませているかと思うと申し訳ない気がします。

申し訳ないといえば、長岡利彦さんがこの1月27日、54歳で亡くなりました。彼のお父さんは59歳で亡くなっています。私（たち）は勝手にお父さん越えをひそかな目標にしていました。早すぎる死の前でなんだか申し訳ない気分が襲われます。

長岡さんは軽度の「知的障害」があり、ゆうとおんのスタート以来のメンバーです。「ここで生きる」シリーズのトップバッターで登場しています。祭りで好きで野球少年だった彼は、地元の中学校を卒業して布施市（現・東大阪市）にある町工場に就職しました。その後、八尾市内の作業所に移り、ゆうとおんの立ち上げに参加しました。

近年は進行性の難病を抱えて入退院を繰り返していましたが、当初は青年の面影を残すチョイ悪のキヤラクターでした。時にはくわえたばこで格好つけて元気に自転車乗り回していました。

お母さんが亡くなる少し前からグループホームで生活するようになりました。ピリカ（グループホーム）の生活は結構気に入っていました。

この間、日中はゆうとおんはーとの「さをり班」

でお気に入りの車の絵を描き、休みの日には車いすで出かけるのを楽しみにしていました。出かける時はいつもCさんと一緒でした。

Cさんは10年ほど前に地域移行支援で、大型入所施設からゆうとおんへやってきました。大集団の中でもまれてきたことも影響してか、力関係に敏感で、明るく活発ですが、少しとんがったところもあります。時々、弱い者いじめもしますが、根は人好きで甘えん坊です。私には感情の起伏をストレートにぶつけてきますが、長岡さんの前ではいつもにこやかに微笑みます。どうしても分析的に見てしまう私と違って、長岡さんはCさんを丸ごと包み込みます。

ゆうとおんで看護師をしていた滝本さん（故人）が、定時制高校の養護教諭をしていた時の生徒が中山さん（仮名）でした。滝本さんは少し不安定なところのある中山さんのことをとても気にかけていました。その中山さんが安心して気を許していたのが長岡さんでした。滝本さん曰く「中山さんは会うだけでなく、電話もたびたびして自分の話を聞いてもらっている。長岡さんはじっくり聞いてくれる。中山さんは、それで救われているところがある。相手の女性の話をじっくり聞くというのはモテる秘訣やよ」。

長岡さんは、身体がまだ元気なころ、たまに自分のベッドの枕元に煙草の小さな黒焦げをつけることもありました。医師からとめられているのに、こっそりうまか棒を食べていることもありました。最近

も、部屋を訪ねてくるCさんに頼んで、お菓子を持ってこさせることもありました。だけど「女性にやさしく、他人とは争わず、ダンディーに」というスタイルだけは、終生変わりませんでした。

ゆうとおんは設立当初から一泊旅行（一回だけ2泊3日で行きました）が、帰路、ぐったりしている人がたくさんいました。を続けています。昨年の一泊旅行は伊勢方面でした。もちろんCさんとは仲良く過ごしていました。その時々で彼女が変わっていることもありましたが、旅行先ではいつも熱心に土産物を選んでいました。旅行に参加できなかった残留組（の女性たち）へのプレゼントです。



長岡さんと同じグループホームだったDさんは、現在、彼の職場に近いグループホームに転居しています。Dさんは就労継続支援A型の事業所に通っています。もともと労働能力は高いDさんですが、日常的な悩みは尽きません。つい先日、彼の相談支援を担当しているK事業所のEさんと彼の話し合いに同席しました。Eさんは、Dさんにプレッシャーを感じさせないように配慮しながら、彼の「もう一歩」の踏みだしを促します。へなちょこの直球しか投げ込めない私なんかにはできない芸当です。その場に居合わせた私は、Dさんも納得した話し合いになったとの印象を持ちました。ところが翌日にはEさんの「励まし」もプレッシャーだったことを知ります。

Dさんは繊細な神経の持ち主です。他人にも繊細な対応を期待します。そして自分の気持ちを解つてくれない他人の無神経に傷つきます。自分が傷つくと同時に、他人もまた傷つく存在であることをストンと了解できた時、彼のころはもう少し自由になっただけでいいです。他人との関係の中で身構えてしまふことの多いDさんですが、不思議と長岡さんとは気軽に会話できていました。

今、グループホームでは、Fさんの自傷行為への対処が大きな課題になっています。Fさんは、私なんかにはちゃんぶんかんぶんなゲームの話や放送界の内幕話が得意です。話の内容は理解できなくても、生真面目で陽性なFさんの気分だけは伝わってきます。たまの立ち話は楽しみでした。何年前か、ゆうとおんの日帰り旅行で彦根城に行きました。彦根城の天守閣にのぼろうとしたら結構急な階段があります。Fさんは下半身に麻痺があり、普段は長岡さんと同じく車いすを利用しています。だけどハラハラする私たちをしり目に自力で天守閣に辿りつきました。その頑張り屋のFさんの自傷行為が目立つようになってきました。あれやこれやと対応を模索段階ですが、自分に向かう暴力の孤独を思います。

長岡さんはいい意味で適当な人でした。そして、無理なく自然体で他者と楽しみを共有できる稀有な人でした。1月28日、たくさんの人に見送られ、リリースペースありありから天国に旅立ちました。

一九九一年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日)発行 定価50円



この街で暮らす



たったひとりの世界では、自分は見えない。  
道草をしながらふたりで歩く散歩は、この世界とつながり、相手の瞳に自分を映し出す時間。  
こんな時間をすべての人が持つことができれば、わたしたちはもっともっと優しくなれるだろう。  
額瀨あや(映画監督)

はみ出していく。  
よし、はみ出していこう。

暮らしの場所を限られてきた人たちがいる。自閉症と重度の知的障害があり、自傷・他害といった行動障害がある人。世間との間に線を引かれ、囲いの内へと隔てられた。そんな世界の閉塞を、軽やかなステップが突き破る。東京の街角で、介護者付きのひとり暮らしを送る人たちが。タンポポの綿毛を飛ばしブランコに揺られ、季節を闊歩する。介護者とのせめぎ合いはユーモラスで、時にシリアスだ。叫び、振り下ろされる拳に伝え難い思いがにじむ。関わることはしんどい。けど、関わりなくなることで私たちは縮む。だから人はまた、人に近づいていく。

ひとはさびし、ふたりで歩く。  
雨は降る、陽は輝く。人は泣き笑う。

<知的障害者の暮らしとは？>

知的障害がある人の暮らしの場は広がってきていますが「重度」とされる人の多くは未だ入所施設や病院、親元で暮らしているのが実情です。  
2014年に重度訪問介護制度の対象が拡大され、重度の知的・精神障害者もヘルパー付きのひとり暮らしが出来る可能性は大きく広がりました。  
そんな中、16年夏には相模原障害者殺傷事件が起きました。この街で誰もがともにあるために、新しい選択肢を見つめてみませんか？



2018年/95分/16:9/カラー/日本  
監督・撮影・編集: 穴戸大裕 / 音楽: 末森樹 永原元 / 音響構成・整音: 米山靖 / 宣伝デザイン: 林よしえ / 宣伝イラスト: 木下ようすけ / 題字: 岡部亮祐  
特別協力: 全国自立生活センター協議会 / 助成: 公益財団法人 キリン福祉財団 / 企画・製作: 映画「道草」製作委員会  
お問合せ: 映画「道草」上映委員会 Tel: 080-3457-8833 FAX: 087-883-6570 info@michikusa-movie.com http://michikusa-movie.com/

3月23日(土)~

**シネ・ヌーヴォ**  
大阪メトロ中央線 阪神なんば線「九条駅」徒歩3分  
TEL.06-6582-1416  
http://cinenuveau.com/

3月23日(土)~29日(金)

四條烏丸下ル西側COCON烏丸3F  
**京都シネマ**  
KYOTOCINEMA  
☎075(353)4723

4月13日(土)~26日(金)

JR「神戸」から徒歩10分 / 神戸高速「新開地」から徒歩5分  
**神戸アートビレッジセンター**  
Kobe Art Village Center  
078-512-5500 kavc.or.jp

料金・各種割引・上映スケジュール詳細は各劇場へお問い合わせください。

■監督・撮影・編集 穴戸大裕(ししど・だいすけ)  
映像作家。学生時代、東京の高尾山へのトンネル開発とそれに反対する地元の人びとを描いたドキュメンタリー映画『高尾山十四年目の記憶』を制作(2008年)、人工呼吸器を使いながら地域で生活する人を描いた『風は生きよという』(2013年劇場公開)、知的障害がある人の入所施設での人生を描いた『百葉の葉さやま園の日』(2016年)がある。

## 社会福祉法人 ゆうとおん

本部 / 〒581-0834 八尾市萱振町 2-133 TEL 072-993-0785 FAX 072-993-0784  
 ゆうとおんはーと / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-68-1 TEL 072-926-6200 FAX 072-926-6199  
 ゆうとおんうえーぶ / 〒581-0817 八尾市久宝園 2-30-4 TEL 072-926-1543 FAX 072-921-8883  
 ゆうとおんほーぷ / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-73-2 TEL 072-927-1300 FAX 072-927-1301  
 スタコラハウス / 〒581-0802 八尾市北本町 1-1-11 TEL 072-995-4387 FAX 072-995-4387  
 メールアドレス / [youtone@live.jp](mailto:youtone@live.jp) ホームページアドレス <http://www.eonet.ne.jp/~youtone>  
 年会費 / 1口 2,000円 振込先 / 郵便為替口座 00910-9-106532

発行人 / 関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4階  
 定価 / 50円